

## 東洋英和と私

東洋英和も 110年を越す歴史のなかで多くの卒業生を世に送り出しました。なかには、親子三代、孫もあわせて四代という方もたくさんいらっしゃいます。そうした方々のなかから御二人の方に思い出を語っていただきました。上野さんは、六本木二番地で誕生され、関東大震災、東京大空襲、阪神大震災に被災されるという体験をお持ちでいらっしゃいます。旧東光会、同窓会会長として、長い間、お働き下さいました。木山さんは、中高部母の会会長を三回なさり、聖日拝に出席できない母の会卒業会員の方々のために長いこと週日礼拝を守られて、聖書研究の集いを開き、敬和会として活動なさいました。

### — 英和と私 —

昭和六年卒 上野 美代子（福井）

私は大正二年（1913年）生まれで、幼稚園第五回生です。その頃の校舎は、今の正門からだらだらと坂を下りた左側に幼稚園があって、一階は板の間、二階は畳が敷きつめてありました。男の子三、四名、女の子十数名の園児は、小さな椅子を丸く輪にして座り、先生は児玉光子先生、二階堂先生の愛情に満ちたご指導を頂きました。礼拝の時にはミス・クレーグも来て下さり、皆ひざの上に手を合わせ、お祈りをしました。此の園舎の左の外には、小高い木の茂ったお庭があり、電信柱を横にしたような、丸太の両端をしばってぶらさがっている遊動円木があって、お遊び時間に皆で腰かけ、ブラブラして遊んだ楽しさは忘れられません。私は二年上の姉と共に、紫の矢絣の着物に



エンジのはかまを着て通っておりました。

門の右側は崖になって、つつじなど灌木がぎっ

しりと茂り、崖の下にはテニスコート二面程の運動場のつづきに、横段の木を重ねて建てた、すてきな三階建ての小学科、女学科の校舎がたっていました。その頃の院長は、ミス・ブラックモア（プーチャマ）。小学部の講堂では、毎朝ミス・ハミルトンかミス・フルトンの美しいピアノのリズムに合わせて席につき、礼拝を守りました。

此の校舎は天井までの大きなドアで仕切られており、学芸会とか大きな集会の時にはドアが全部あけられて大きな講堂にすることが出来ました。当時、全国「少年禁酒軍」というキリスト教の組織があり、その禁酒競争演説会で優勝したこともありました。この講堂の二階に、寄宿舎や宣教師の方々のお部屋があり、廊下はうねうねと波のようにへしまがり、はしご段は角がこすり切れて、後ろへつんのめるような古びた建物でした。お昼の頃の西洋の先生方のお食事のおいしそうな香りや、おやつ頃のケーキを焼くプーンとした良いにおいは忘れられません。廊下続きで女学校の教室、裁縫室などがあり、毎朝の礼拝は地続きの麻布教会で行われ、成績順に並んで出席しました。日曜日の礼拝も全員出席、クワイヤは五年生の有志でした。



<小学科一年生のころ>

宣教師の先生方は、深い愛情をもって生徒一人一人を見守り、敬神奉仕の精神に徹し、英和の良き教育の基礎を築いて下さり、英和に育てて本当に幸いだったと感謝し続けています。プーチャマはじめ先生方は、廊下を走ってはいけない規則に反し走りぬけると、どこかで見ておられ、首筋をつかまれて元のところまで連れ戻されたり、礼拝の最中どこからともなくクス笑いが伝染して、こらえていてもつまみ出されたりもしました。

女学校は午前中は日本学、午後は全部英学で、クラスが分かれ、午後になると二年以上の姉の学年の方々が半分くらい私のクラスに落ちてこられ、私のクラスからも同じように下に落ちていきました。女学校は日本学五年、英学を三年終了すれば卒業出来ることになっていました。午後の英学は聖書や料理も全部英語、体操も“one, two, one, two, left, right, left, right.”と英語だったので古い卒業生はよくお話もでき、手紙も自由に英語で書ける方が沢山おられました。私も卒業式の祝辞も答辞も英語でいたしました。卒業式にはカナダ大使夫妻も出席され、ごほうびにシェークスピアの「ラームステール」の本を頂きました。卒業後、東京女子大と津田塾の本科に入れましたのに、津田を結婚のため中退したのを生涯後悔しております。

戦後の1969年と1971年の夏四十日間、朝日新聞を一年間朝夕配達した優れた大学生四百人を、最大の客船さくら丸にのせ、カナダ、アメリカへの洋上大学に女子学監として参加、現学士院長の天文学の藤田良雄先生（1996年文化功労者）も教授として乗船して頂き、船の甲板に望遠鏡をそなえて月を見、人が初めて月に着陸したところを教えてくださいました。

ヴァンクーバーに着いた翌日、かねてからミス

・ハミルトンにお目にかかりたいと手紙をお出ししていたので、ミス・ハミルトンは当時腰骨を骨折し、松葉杖でやっと歩いておられたのですが、鎌倉先生が二日ばかりで車でミス・ハード、ミス・サティアー、ミス・クックと共に船まで連れて来て下さいました。ミス・ハミルトンは船のタラップを船員に背負われて船内に来られ、昼食を共にされ、帰りたくない夕食も船で召し上がり、夜おそく帰られましたが、その時手を振ってお別れ



<洋上大学にて>

した時は、涙が止まりませんでした。その時お目にかかったのが最後で、先生方皆もう天国に逝かれました。

私は英和とは本当にご縁が深く、昭和七年頃今の校舎の前に、ヴォーリスさんが校舎を建てられたとき、鳥居坂二番地に宣教師館と寄宿舎と幼稚園を建てられ、後年長野先生が幼稚園を東光会館に貸して下さり、私は会長として、二十年同窓会の御用をつとめさせて頂きましたが、ふしぎなことに、此の地が私の出生地で、松尾先生が、私をのせた乳母車を母が押していたのを度々見た、とおっしゃっていました。私の在学中、母が宣教師にお目にかかりに行く度に、庭は昔のままの日本庭園で、そこに生えている松は四十七士の一人が馬をつないだ松だと話しておりました。

今年、私の曾孫が幼稚園へ入れて頂きましたが、母（静岡英和）から私、私の長男、娘、孫四人と曾孫を加え、五代も英和のお世話になっております。私の人生は英和によって育まれたものと感謝しております。

## — 宣教師の方々への感謝 —

昭和10年（1935年）卒 木山房子

『時を費すことなく、即時寄宿舎の開設に向けて活動して下さい。』

ミス・カートメルが東洋英和を創設されるに当り最初にとって下さった手続き（1984年10月発行、『東洋英和女学院百年史』22ページ）のことが、これに続いて記されています。

『1千ドルを約束したといふあなたの手紙を読むや否や、私はアイキンス夫人のところへ行ってその手紙を見せ、そして二人で揃って銀行へ行き五百ドルずつ引出して、合計1千ドルを婦人伝道会の会計に繰込み、直ちに麻布の敷地購入の代金として払い込んで来ました。』



<木山房子さん（中央）>

それは明治16年（1883年）夏のことでありました。

「切支丹禁制の高札」が撤去されたとはいえ、このカートメル先生のご報告から百年余を過ぎた今日でさえ、東洋英和に入学を許された者達が、どのように導かれ、信仰の道を辿らせていただけるかと申しますと、決して容易ではないことに変わりはありません。

けれども、どれほどの障害があるとしても、宣教師の方々が耐えられた試練に比べることは不可能です。宣教師が残された本国への報告書を見る度に「異邦人」としての日本人を、——日本だけでなく世界中の人々に向かってみ言葉を伝えて下さった苦闘のお姿に接するのです。

私は、大正13年（1924年）4月ミス・ブラックモアが東洋英和の校長としての最後の年に小学科に入学いたしました。母の話によると「小豆粒みたいに小さな子」でしたから、小さい順に歩くといつもブラックモア先生の傍に座りました。

何にも彼もが珍しく、何にも彼も嬉しくて仕方がなかったものですから、文芸会の最中にお行儀悪く立上って見ていたのでしょう。

ふわっ、と大きな温かい手で抱き上げられて、ワンピースの裾をきゅっと伸ばされてからまたふわっと椅子の上に乗せて下さったのが、校長先生のミス・ブラックモアだったのです。叱られたという記憶は全くありません。むしろニコリして椅子に座らせて下さったことだけしか思い出せないのです。その大きなお姿と、大きな御手のぬくもりが、幼い私の魂の奥深く、電撃のように走ったことは間違いありません。

そのミス・ブラックモアへの思いを、片時も失われずに98才の今日までを過して来られた秋山はる先生は、ミス・ブラックモアがご帰国になられた年の4月から私の小学科2年の受持をして下さいました。



<秋山はる先生と別科生>

『目で見ると東洋英和の110年』（1993年発行）に、「秋山はると別科生」の写真と記事があります。戦時色に変わりつつあった時代の中で、帰国子女を受入れる「別科」は設置されており、秋山先生は目立たない、一番地味な存在として、終始特殊な経験を強いられている帰国子女達の学校生活、日常生活を導かれたのです。

経済的な面でも、「不足分を別科よりの寄付で」と書かれている部分を忘れてはならないと思いま

す。このことは後年の秋山先生が、学校に対しても、鳥居坂教会に対してもして下さった大きなご援助がこれを証しております。

秋山先生は、私がミス・ブラックモアから頂いた幼い魂にとってのあの一瞬を今日まで育てていただきました。

二年生のお教室で毎朝「少女パレアナ」を読んで下さって、パレアナの「よろこびの遊び」を子供達のものにして下さいました。

数年後、父の転勤で私が青楓寮にお世話になった約半年、毎朝の祈禱会に「西洋の先生」（カナダの先生方のこと）のお集りの輪に加えて下さいました。ノンクリスチャンの家庭に育った私に教会のことや祈禱会のことを教えて下さったのです。この祈禱会で頂いた訓練は、女学校四、五年の毎朝を同級生とチャペルで、一年生と二年生の祈禱会を続けるきっかけとなり、結婚後20年ものブランクの後教会生活を許されてからは、聖日礼拝と祈禱会が信徒としての最も大切な奉仕として守らせて頂ける道が開かれていたことを思っ感謝しております。

昭和8年（1933年）木造校舎が改築され、東洋一ともてはやされたヴォーリス氏の設計になる新校舎が落成しました。昭和9年（1934年）11月6日に創立50周年記念式典が挙行され、文芸会、展覧会等々当時としては画期的な行事であったと思います。

中でも Units of Workの成績発表は、幼稚園師範科と共に、高女科五年生の手になるものが主であった、と百年史(306ページ)に詳しく記録されており、その後20年余り後まで地下の準備室に保存されていたものでした。

文芸会では今村寿々代先生の作、演出の「東洋英和の歴史」が上演され全校が観劇に夢中でした。

第二幕がパントマイムで、初めての二人の入学生と、種田先生が私で、日本髪を結って、指だけでオルガンを弾いたことも楽しい思い出です。

校友会誌「楓」の創立50周年記念号の巻頭言や東洋英和YWC A20周年記念のご挨拶を担当させていただいたことなど、ミッションスクールである母校の歴史を改めて認識し、英和生としての誇りを高められたことでした。

ミス・ハミルトンは音楽がご専門でしたから一般の学校とは全然異った勉強をさせていただきました。毎朝の礼拝での「さんびか」「主の祈り」聖書、小説教と祈禱のプログラムで12年間導かれた感謝は到底言い尽くせません。

昭和18年（1943年）9月、ミス・ハミルトンは敵国人として交換船でご帰国を余儀なくされ東洋英和から宣教師のお姿はすべて消えることになりました。

「戦争の嵐に日本とカナダは引き裂かれたが、信仰によって築かれた共同体は、心の絆を失わなかった」（百年史335ページ）」と明記されていることは、過去において幾度も、幾度も通って来た試練を、この時もしっかりと踏みこえられたことを示しています。

ミス・ハミルトンは東洋英和の校長としての責



<鳥居坂教会にて>

任を日本人校長にゆずられるに当り、宣教師としての使命を教会（麻布教会 — 現鳥居坂教会）に託して行かれました。

時代はずっと後になりますが、来日30年余を日本の伝道と英語教育に尽くされたミス・ロジャースのことは多くの方々がいきいきと思っておこされることでしょう。去る11月3日には東洋英和のご招待で来日なされたロジャース先生が、鳥居坂教会の礼拝にご出席下さり、一同大喜びでお迎えいたしました。

六本木から英和に向かう通学路で、遠くの方から、それも反対側を歩いている小学生達が「ロジャースせんせい」と呼びかけているのを何度も見かけました。先生のお人柄のにじみ出ているエピソードです。

平成8年（1996年）3月、ブラウン先生がご帰国になり、今度こそ本当に一人の宣教師もお迎え出さない時が来たのです。「もう今度は日本から世界に向けて宣教師を送り出す番になったのです。」と告げられておりますが、神学大学はもとより、各教会から、その奉仕に立ち上る者を興こして下さるようにと祈りたいと願っております。

伝道と教育と福祉の奉仕者として私達の国でお働き下さった先生方が、直接肌で幼い魂にまで語りかけて下さった尊いお姿を継承する教会、学校、施設などの群となることが出来ますようにと祈りたいと思います。

最後に私事の感謝をつけ加えさせていただきます。平成8年（1996年）4月から、孫の一人が東洋英和の小学部でお用いいただけることになりました。私にとってはまるで夢のような出来事でございます。貧しい器であっても、祈りつつ、学びつつ励んでお仕えさせていただけますようにと願っております。

---

「今こそゼルバベルよ、勇気を出せと主は言われる。大祭司ヨツアダクの子ヨシヨアよ、勇気を出せ。

国の民は皆、勇気を出せ、と主は言われる。働け、わたしはお前たちと共にいると万軍の主は言われる。

わたしの霊はお前たちの中にとどまっている。恐れてはならない。」

ハガイ書 2章4節5節

---

このたとえようもない混迷の時代のただ中において、主は信ずる者達にたえず語りかけて下さいます。

ある名医はこう言われました。

「医者としてできることは

黙って聞いてあげること、

そしてさすってあげること、

更にほめてあげることです」と。

教会の信徒としてそのようなことがさせて頂けるなら —— 。そこに愛のわざが与えられます。

宣教師の方々はこの福音を携えて世界中に出て行かれました。その足跡を踏んで行く人々が与えられますように祈ります。感謝をこめて。

あとがき

中高部の校舎は四代目となりました。マーガレットクレイグ講堂の面影を見事に再現した新講堂とともに英和の新しい歴史も始まりましたが、中心にあるのは、昔から変わらぬ「敬神・奉仕」の精神であるということ、御二人の文章を通して、あらためて感じました。

（中高部 古澤育恵・保坂綾子）